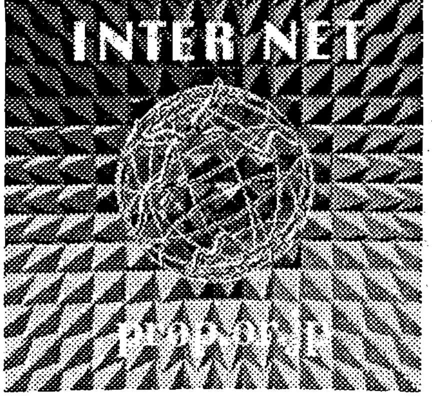
量の補助メモリを必要とします。近い将来、「ビデオCD」といわれる製品が出てきますが、今まで音楽が入っていたCDに動画を入れるわけで相当な圧縮がなされています。でも、技術の進歩は速いので（この分野は3年で4倍の進歩をすると言われています）今は遅かったり性能が悪くとも、1年や2年はあっという間ですから、気が付いたら結構便利だね、と思うでしょう。今、皆さんの身近にあるものではそのようなものが多いはずです。音や映像を使った、人に優しい装置（実は中は高性能な計算機）が出現しています。でも、まだ作っている人が「何が優しい」のか結構分かっていないので、まだまだ使いにくい装置は多いですね。^_^;

もう1つの進歩は、ネットワークです。今までは電話のような遅いネットワークでみんな我慢してきたのですが、これからは今までの千倍も百万倍も速いネットワークが出てきます。百万倍になると、さすがに従来の銅線では無理で、光で伝える光ファイバーが必要になります。「テレビ電話」や双方向のテレビなどの技術は、このような高速なネットワークに支えられています。電話やテレビのように、もともとネットワークを必要とするものだけではなくて、計算機も高速なネットワークが出てきたおかげで、新しい使われ方をし始めました。世界中の計算機が、高速または中速のネットワークで結ばれています。「インターネット」と言われるのは、このようなネットワークで世界の3万の組織をつないでいます。インターネットでは、今、名前が分かっているだけで200万台の計算機が、ネットワークを介して直接つながっています。「つながっている」という意味は、相手の計算機の入口まで入っていけると思ってください。家は鍵を持った人しか普通は入れません。それと同じように、自分の登録している名前と対応する「パスワード」を知っている人しかアクセスできません。

さて、このような技術があると我々の暮らしがどのように変わるのでしょうか？ズバリ、便利になります。時間を越え、距離を越え、国境を越えて便利になります。まずは道具が万能の計算機ですから、お金さえかければ何でもできます。でも、いくらお金をかけてもできないものって一杯あるでしょう。人はいつかは亡くなりますし、好きな人の気持ちはなかなか分かりません。技術は所詮技術ですから、それで解決できないことはたくさんありますし、これからもそうでしょう。人間はそのために法律を考え、教育を行い、倫理だとかエチケットだとかの制度や概念、哲学を出してきたのです。これらのことはこれからの「ネットワーク社会」でもやっぱり大事な、さらに大事なことになってきます。今まで面と向かって議論を行ってきたのに電話だと、つい本当の意見交換にならなかったことがあるでしょう。同じように、電子メールだと手紙と同じなので、時間が経つとなかなか話がまとまらない時が出てくるでしょう。

少し否定的なことを先に書きましたが、上のようなことを一応念頭に置いた上でも、やっぱりいろいろなことが便利になります。大学から幼稚園までインターネットで結ばれますから、共通のよい講義や授業が受けれるし、教材も豊富になるでしょう。医療でもICカードを持っていれば、その人の今までの身体のデータが入っていますから、



何処で倒れても近くの医者で診てもらえるでしょう。診断されたデータは大きな病院の診断システムで調べられるので、可能性が非常に少なくとも、疑わしい病気の名前の一覧と可能性の確率が、また希望すれば、より詳しい情報が画像を使って送られてくるでしょう。家庭では、冷蔵庫や電子レンジなどの製品がネットワークに結ばれているので、食糧の在庫管理ができますし、今までの家族の食べたものの記録が家の計算機に入っているので、献立も家族の嗜好を考えながら表示されます。近所のスーパーや有名レストランと通信して、旬の料理や料理のコツを聞くことも可能です。家庭から銀行を通して送金も可能だし、銀行の残高が分かります。お金を持っている人には資金運用にも乗ってくれるでしょう。新聞は紙での宅配はなくなっていくでしょうね。ネットワークを通して配信され、必要なら音声で読んでくれたり、絵も必要なら動画になるでしょう。新聞も、雑誌も、本も、ラジオも、テレビも融合されるでしょう。分からないことは、世界中の図書館に即時に聞けるようにもなるでしょう。

言い出せばきりがありません。でも、これらは本当に難しい新しい技術の開発が必要ではなく、システムの作り方と法律の規制緩和などの問題なので、間違いなくできると思います。実際にはいろいろな細かい問題はあるのですが、着実に解決されています。計算機とネットワークが結合した新しい枠組が動き出すので、「産業革命」とまで言う人もいるくらいです。今、私はコンピュータの画面上に映る阪大の計算機センターの部屋と、アメリカのある研究室の部屋を映す画面と、音声会議の画面を開きながらこの最後の文章を書いています。朝は家から研究室にMacintoshでログインして文章を入力していました。これをやっている間もメールやニュースが飛び込んできています。私達にとって日常的なことがいずれ社会全体で当たり前になるでしょうね！

インターネットとパソコン通信

1.パソコン通信

ユーザーはパソコンや専用ワープロを使ってホストに接続します。ホスト機はプロップの場合はパソコンですが、ニフティ・サーブやPC-VANなどでは大型計算機や、ミニコンや、ワークステーションが使われています。使える機能は電子掲示盤や電子メールが多く、情報を共有したり情報を交換することにユーザーは使います。ホストに有用な情報や機能があり、ユーザーがそれを使う時、ホストをサーバ、ユーザーをクライアント(顧客)と計算機の世界では言います。ホストにあるプログラムや文書ファイルをダウンロードするのは、このようなサーバ・クライアントの実現の1つの方法です。パソコン通信はホストが1台で（ニフティでは百台以上のミニコンで1つのホスト機能を分担している）、そこにユーザーが通常、電話を通して接続しています。つまり、パソコン通信は1つのネットワーク・システムです。

2.いろいろなネットワーク・システム

ネットワーク・システムには大学のネットワークのように研究や教育のためのネットワークや、企業のネットワークのように開発や営業等に使われたり、またパソコン通信のようなものもあります。それぞれをネットワークと言います。

3.インターネット

インターネットとは、このような多くのネットワークを相互に結ぶネットワークです。ネットワークのネットワークとも言います。インターネットでは1つのネットワーク・システムをドメインと言います。ネットワークで結ばれずに1台の計算機でもいいのです。だから、プロップは1つのドメインであり、

prop.or.jp
の名前を最近取得しました。jpは日本であり、orはorganizationを指し、学術(ac)、企業(co)、政府系(go)以外の属性を持つものに与えられます。たとえば、

osaka-u.ac.jp	大阪大学
kubota.co.jp	クボタ
kantei.go.jp	首相官邸

などです。propはパソコン通信を持つ組織として承認されているわけです。prop.or.jpの下にどのようにサブドメインを作ろうと、名前の作り方のルールを守れば許されます。将来、梅田以外に神戸や京都や和歌山にプロップの支部を作って、それらをプロップネットの中でどのように接続しても構いませんし、内部でどのような使い方をしても構いません。ただ、プロップからインターネットに出る時には、インターネットの約束は守らなければなりません。約束とは、電子メールの形式とかです。だから、プロップネットがパソコン通信であっても構わないのです。ニフティやPC-VAN等の大手のパソコン通信は、以下のようにインターネットのいろいろな使い方ができます。

・パソコン通信から世界中の計算機に接続する
・パソコン通信から世界中の計算機のPDSファイルを取ってくる
・ニュースを交換する

要するに、パソコン通信は1つのネットワーク・システムであり、インターネットはいろいろなネットワークシステムを相互接続したネットワーク同士を繋ぐネットワークなのです。

筆者紹介　中野秀男

昭和23年1月1日	大阪市生
昭和50年3月	大阪大学 大学院工学研究科通信工学専攻博士課程終了 工学博士
昭和50年4月	大阪大学 工学部通信工学教室助手
現在	同 助教授

現在の研究テーマ
○組合せ最適化問題に対する近似解法　○計算幾何学　○暗号理論と情報セキュリティ
○ソフトウェア開発環境
興味ある技術
○ハイパーテキストの概念を用いたプログラム開発環境　○ネットワークとワークステーション
○暗号解読　○シミュレーティド・アニーリング法と遺伝アルゴリズム
外部団体
○電子情報通信学会会員（情報セキュリティ専門委員会委員）　○情報処理学会会員
○ソフトウェア科学会会員　○日本オペレーションズ・リサーチ学会会員
○システム制御情報学会会員　○日本応用数理学会会員　○IEEE正会員
○ACM正会員　○ソフトウェア技術者協会代表幹事
○関西ネットワーク相互接続協会（WINC）代表幹事　○NeXUS関西支部幹事

(株)ジャストシステム発刊
『月刊ジャストモアイ』
7月号より転載

ノーマライゼーションをめざして

大阪の市民団体「プロップ・ステーション」の活動

木地本昌弥

「企業人募集！障害者にパソコンを教えよう。」

私が「プロップ・ステーション」を知ったのは昨年の2月のことである。ある新聞の社会面に募集記事が載っていたのだ。それまで障害をもつ人に対するボランティアというと、身の回りの介助を想像していた私にとってパソコンの知識、アプリケーションの知識を教えるためのボランティアが必要とされていることに非常に興味をもったことを覚えている。

実際に現場へと訪れ、セミナーを見学したり、障害をもつ人と話をしたりしてみて、彼らにとってパソコンというのはかなり大きな役割を果たしていることを知ることができた。彼らが不自由だと感じているところをパソコンは補うことができるのだ。例えば手の不自由な人には書く手段となり、耳や口の不自由な人にとっては自己の意志を反映する手段として社会参加への強力な武器となっている。

What's プロップ・ステーション？

「プロップ・ステーション（略称プロップ）」は、社会は障害をもつ人とともに構築されるものだというノーマライゼーションの達成を目指し、1991年5月に発足した市民団体である。ノーマライゼーションとは障害者や高齢者の施設を遠くにつくり隔離・分断するのではなく、障害者も高齢者もすべて人間として普通に生きていくことができる社会充実をはかり、医療・教育・福祉の統合化を進め、心身障害者の自立的な生活を保障す

「プロップ・ステーション」の代表竹中ナミさん。「ナミねぇ」の愛称で親しまれている。

べきであるという考え方である。このような考え方が広がってきてはいるが、現状では障害をもつ人は職業選択の乏しさなど、就職の際に不利な点が多い。

プロップ・ステーションではこの点を何とかしなければ、ということで企業との接点を探し、コンピュータにその可能性があるという結論に達した。コンピュータは障害をもつ人にとって、その障害がハンディとなりにくく、また在宅勤務も可能となる。そこでコンピュータ・セミナーを開講したわけであるが、その目的はコンピュータを教えることのみではなく、実際の就労が目的である。

「プロップ」というのは支え合うとか支柱という意味である。企業と障害者、障害者と障害者、障害者と社会のどちらかが一方を支えるのではなく、どちらもが支え合う関係をめざしたいという気持ちをこめて命名された。その活動はコンピュータ・セミナーの開催、機関誌発行、相談事業(自立に関する)、イベントやシンポジウムの開催、パソコン通信ホスト局の開設、などがあげられる。

現在、事務所は社会福祉法人大阪ボランティア協会の中にある。会員は約150人。障害の有無を問わずプロップの主旨に賛同する人たちばかりである。

その代表を務めるのが竹中ナミさん。彼女には重症心身障害の娘さんがいる。その娘さんをもって知ったのが、日本の福祉が「分ける」ことから始まっているという現実。

「現在、身体障害者の出生率が約3%、内臓の障害や精神障害などの人を含めると10%近いと言われています。しかし、私たちの生活半径の中でその10%の人たちがいるかというと、実際はいないのです。それが日本の〈おかしさ〉の出発点だと思います」。竹中さんはこういう。

障害をもつ人にとっては訓練所から養護学校、そして卒業後には施設か作業所、最後は家族が世話をするしかないというお定まりのコースしかないわけである。「この隔離政策が生んだ悲劇をいくつも見てきましたし、結果的に日本では障害者と社会(行政や企業)が敵対関係をとらざるを得ないのだと痛感しました」。

福祉先進諸国ではノーマライゼーションの理念が発達しているが、日本でこれを実現するためには、障害をもつ人自身が殻に閉じこもることなく、アクティブな働きかけを社会に対して行っていかなければならない、また、それに応える人たちとの出会いの場を造っていかなければならないという考えのもと、彼女の20年近い経験を基に障害をもつ人ともたない人が互いにプロップ(支え合い)しながら、自立と社会貢献を目指すことを目的としてプロップ・ステーションが設立された。

出会いの場 — コンピュータ・セミナー

その活動のメインであるコンピュータ・セミナーは現在、アップル社、NEC、その他ソフトハウスなどの協力を得てマッキントッシュコースとNEC98コースにわかれて行われている。それぞれ第一線で活躍する企業人50名がボランティア講師として20数名の障害をもつ人にコンピュータの技術指導を行っている。セミナーは夜間に設定されており、ただ単に企業人がパソコンの技術を教えるというだけでなく、企業人と障害をもつ人との出会いの場として考えられている。企業人と接することにより障害をもつ人側は働くことの難しさや責任感を、企業人は障害をもつ人の働くことへの意欲や能力を感じているようだ。現在不況ということもあり、まだ実際の就労に結びついてはいないが、受講中にボランティア企業人の会社でアルバイトを経験した人もいる。

「私たちスタッフは出会える場所をセットしました。それから先は障害者がい

かにうまくボランティアで集まってくれた企業人を活用できるか、企業人も教える、教えられるという関係をいかに越えられるかです。出会いの場所を作ることによって、障害者がドアを叩くだけでなく、内側からもドアを開いてくれる人が出てくるかもしれません。」(竹中さん)

プロップ・ステーションの準備した出会いの場ではこうして何かが少しずつ生まれているという。参加しているほとんどの障害をもつ人は、働くことに憧れているにすぎず、その社会的責任までは考えていなかった。ところが、企業人と出会うことによってビジネス社会の現状の厳しさを感じてきているそうだ。また、企業人側からするとこんなにコンピュータを使いたいという意識があるとは思わなかった、こんなにコンピュータを使いこなす能力があるとは思わなかったという。はじめはボランティアとして同情的な気持ちで参加していたが、もしかしたら自分の仕事を任せられるかもしれない、同僚として迎えられるかもしれないと言う人もでてきているようだ。

情報交換の場――「フランカー」

またプロップ・ステーションでは、年に4回「FLANKER(フランカー)」という機関誌を発行し活動の報告やいろいろな情報を発信している。この「フランカー」の編集も障害をもつ人ともたない人が一緒になって作っている。編集長である桜井龍一郎氏は現在30歳。大学2年の時に器械体操の練習中に障害を負い、胸から下と腕の一部の感覚が麻痺している。現在彼はCG製作会社に就労し、在宅勤務としてベッドの上で入力作業を行っている。そしてボランティアとしてこの「フランカー」の編集長として社会貢献を果たしている。

「フランカー」のスタッフには編集長をはじめ重度障害者が多数いるため、編集の打ち合わせ、校正などをパソコン通信で行っている。この通信ホストは独自のホスト局(プロップNET)で、現在200人以上の人が登録している。このネットには障害者だけでなく、セミナーのボランティアである企業人なども多くアクセスしており、日常の会話からコンピュータ関係の質疑応答など幅広い内容が特徴のようだ。またこのネットの独自企画としてホストがシスオペをつとめる「Accessはまころいす」というボードがある。「はまころいす」とは「はま」が関西の方言でタイヤのこと、「ころ」はころがすの意、つまり車椅子のことで、これはホストの坂上正司氏の造語である。外出に際して車椅子での街のアクセスが実に細かく情報交換されている。坂上氏は現在29歳。高校1年生の時にラグビーの試合中に障害を負ったそうだ。

以前にもこのMOAIで書いたことがあるが(94年1月号「キータッチに思いをこめて」)、障害をもつ人にとってパソコン通信というのはかなり重要な位置を占めるようだ。「友人と電話でおしゃべりをしたいという夢が叶った」「コミュニケーションの手段として」「いろいろな情報にアクセスできたり、いろいろな人の意見を聞けたりするので視野が広がった」などの意見を聞くことができる。

自分の人生を自分自身でマネージメントし、コーディネートする

竹中さんにもう少し詳しくお話を聞くことができた。

――現在の社会と障害者の問題は何でしょうか?

竹中:就労の問題でも教育の問題でもそうなのですが、障害をもって生まれてきていちばん欠けているものは、選択肢なのです。養護学校に行くか行かないか、就労できるかできないか、などは二者択一で選択肢とはいえません。日本の場合は障害者というのは「保護されるべき人々」「共に生きることが難しい人々」という認識が社会全体にあります。そして国の政策もその前提に基づいて作られています。アメリカ流がいいとはけっして言えませんが、アメリカでは障害者一人ひとりが自分は独立した人格をもった個人であるという意識が強いのです。もう少し社会が保護されるべき人々という考え方から、「障害をもった普通の人々」というような考え方になっていくと、教育を受ける権利、働く権利をもつのが当然という社会になっていくと思うのですが。

セミナーは毎週1回開かれる。

雑誌「フランカー」は通巻8号を迎える。

「フランカー」の編集スタッフ。上からプロップNETのホストもつとめる坂上正司さん、編集長の桜井龍一郎さん、松村泰江さん(左)と松村依美子さん。

——社会側ではなく、障害者側の考えはどうでしょうか。

竹中：これまで障害者側は主に福祉政策の対象として位置づけられてきましたが、文明と経済や情報機構の発達に伴い障害をもつ多くの人は社会参加や社会貢献への想いを抱いてきています。自らが社会問題としてのみ存在することを否定しはじめています。

——現状では我々にとって障害をもつ人と接触する機会がかなり少ないですよね。そんな機会を与えるためにコンピュータ・セミナーやシンポジウムの開催、パソコン通信を使ってのコミュニケーションの場所を提供されているわけですが、竹中さんの「プロップ・ステーション」はどうありたいかという考えを教えてください。

竹中：これまで私の見てきたボランティア活動の多くは、障害者に優しくしよう、暖かい手をさしのべようといった活動でした。障害者も何か行動を起こす場合、介助をしてくれる人を見つけてから行動を起こしてました。でもこれではいけないのです。自分が動いてからその活動に賛同してくれる人を探す、その活動に自然と人(ボランティアなど)が同調するようにならなければいけないのです。障害者がノーマライゼーションを訴え、障害をもった普通の人として社会生活を送るためには障害者自身が自分の人生を自分でマネージメントしコーディネートできなければなりません。この２つができることが社会的自立だと私は思っています。どんなに重い身体障害をもつ人も努力すればこれは可能だと信じています。ですから、プロップはそのために必要な適切なサポートとアドバイスをしていきたいのです。

——なるほど。ですからプロップ・ステーションはコンピュータ・セミナーに来るための介助の紹介などはされていないのですね。

竹中：そうです。冷たいようですが、社会に出ると自分で道を切り開いて行かねばなりません。ですから外出介助者や手話のボランティアなど、自分の力で探してセミナーに参加していただいています。どうしても見つからなかった、都合がつかなかった時のみサポートさせてもらっています。

——これからのプロップ・ステーションの方向性をお話しください。

竹中：今までに主に福祉行政の枠組みの中に位置づけられてきた障害をもつ人たちを、社会を構築する一員として迎えていくためには、市民意識の変革だけでなく労働行政と厚生行政の真の連携など施策面の取り組みが必要です。また企業で働く人をはじめ、このような活動に「自発的に」関わるボランティアの力がもっともっと必要です。プロップは、その活動を通じ、自然体で障害者と企業・行政のパイプ役が果たせるようになっていきたいと願っています。

取材をしていて

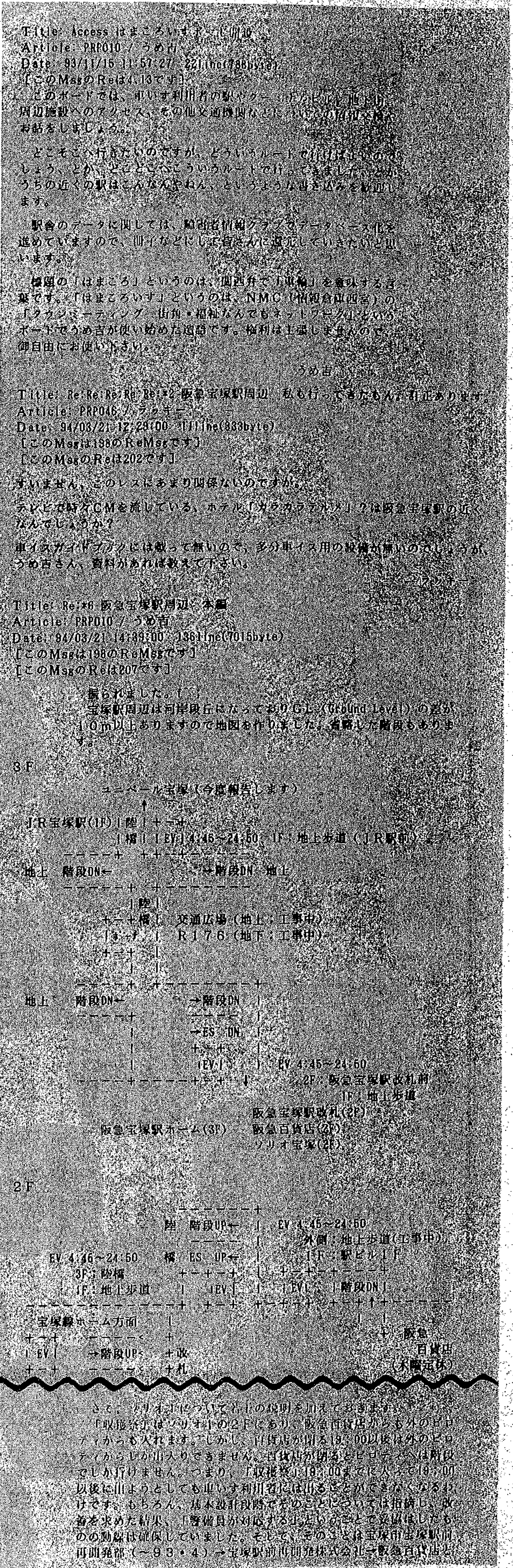
プロップ・ステーションのコンピュータ・セミナーもまだ始まって１年半ぐらいである。ほとんどボランティア講師で成されているセミナーのため、まだ内容自体は甘さを感じるところもある。また、これまで社会に出る機会の少なかった障害をもつ人がいろいろな人と知り合えるので、勉強のためにセミナーに来るというよりも友人と会うためにセミナーに来ているという部分もあるようだ(すべての人がそういうわけではないであろうが)。社会的な面では不況ということもあり、このセミナーからまだ正式な就労には結びついていない。が、つぼみは充分脹らみかけている。これからが楽しみである。

また、私自身の意識も変革できた。最初はボランティアは障害をもった人に対して優しくしてあげる、手助けをしてあげる、という気持ちであった。結局、今思ってみるとすべて「あげる」、こちらの立場が上なのである。ボランティアとしてそういう考えで接している人は長続きしないようである。いかに障害をもった人とフランクにつき合えるかではな

いであろうか。またコンピュータのハードやソフトの面がすべて健常者が使いやすく作られているということ。自分では使いやすかった機能が障害をもった人には使いづらい機能だったり、使えない機能だったりするのである。この辺は本当に私も彼らに接してみて初めて気づいたことばかりである。竹中さんのおっしゃる「お互いが隔離されている社会」に育った私はほとんど障害をもつ人と接することなしに生きてきた。いかに自分中心の目でしか物を見ていなかったかという自分を痛感することができた。

ここまで読まれてお気づきの方もいるかと思うが、今回のリポートでは視覚に障害をもった人についてまったく書かれていない。視覚障害者にもセミナーをという案もあったそうである。しかし、視覚障害者の多くはセミナー会場に１人で来られないというのが現実であった。そこでプロップ・ステーションに視覚障害部「VANGUARD（バンガード）」が発足した。目が見えなくても１人で街を歩きたいという想いに応えるため、VANGUARDではそういう視覚障害者に音声でのアクセスマップを作ろうという企画が持ち上がり、現在製作に入っている。街の地図をデータベース化して音声装置付きのパソコンで情報を提供しようというのだ。そのVANGUARDの活動については次回にレポートさせていただく。◘

●プロップ・ステーション
〒530 大阪市北区同心1-5-27
(社福)大阪ボランティア協会内
TEL&FAX 06-881-0041
●プロップNET
06-882-5393
GUEST可 1,200～14,400bps


Title: Access はまころいすボード開設
Article: PRP010 / うめ吉
Date: 93/11/15 11:57:27 22line(788byte)
［このMsgのReは4,13です］
このボードでは、車いす利用者の駅やターミナルビル、地下街、周辺施設へのアクセス、その他交通機関などについての情報交換やお話をしましょう。

どこそこへ行きたいのですが、どういうルートで行けばよいのでしょう、とか、どこどこへこういうルートで行ってきました、とか、うちの近くの駅はこんなんやねん、というような書き込みを歓迎します。

駅舎のデータに関しては、障害者情報クラブでデータベース化を進めていますので、冊子などにして皆さんに還元していきたいと思います。

標題の「はまころ」というのは、関西弁で「車輪」を意味する言葉です。「はまころいす」というのは、NMC（情報倉庫西宮）の「タウンミーティング 街角・福祉なんでもネットワーク」というボードでうめ吉が使い始めた造語です。権利は主張しませんので、御自由にお使い下さい。

うめ吉

Title: Re:Re:Re:Re:Re:*2 阪急宝塚駅周辺 私も行ってきたもん!訂正あります。
Article: PRP046 / ラッキー
Date: 94/03/21 12:29:00 11line(333byte)
［このMsgは198のReMsgです］
［このMsgのReは202です］
すいません、このレスにあまり関係ないのですが。
テレビで時々CMを流している、ホテル「ガラガラテルメ」?は阪急宝塚駅の近くなんでしょうか?
車イスガイドブックには載って無いので、多分車イス用の設備が無いのでしょうが、うめ吉さん、資料があれば教えて下さい。

ラッキー

Title: Re:*6 阪急宝塚駅周辺：本編
Article: PRP010 / うめ吉
Date: 94/03/21 14:39:00 136line(7015byte)
［このMsgは198のReMsgです］
［このMsgのReは207です］
振られました。(^^;
宝塚駅周辺は河岸段丘になっておりG.L.(Ground Level)の差が10m以上ありますので地図を作りました。省略した階段もあります。

3F
ユニベール宝塚（今度報告します）

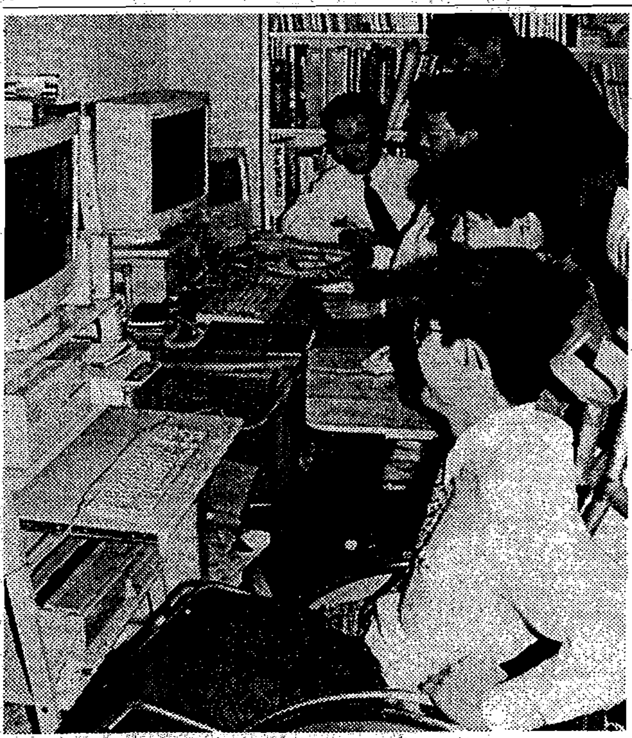
2F

さて、ソリオ1について若干の説明を加えておきます。
「収穫祭」はソリオ1の2Fにあり、阪急百貨店からも外のピロティからも入れます。しかし、百貨店が閉まる19：00以後は外のピロティからしか出入りできません。百貨店が閉るとピロティへは階段でしか行けません。つまり、「収穫祭」19：00までに入って19：00以後に出ようとしても車いす利用者には出ることができなくなるわけです。もちろん、基本設計段階でそのことについては指摘し、改善を求めた結果、「警備員が対応する」ということで妥協はしたものの動線は確保していました。そして、そのことは宝塚市宝塚駅前再開発部（～93・4）→宝塚駅前再開発株式会社→阪急百貨店と

プロップNETの「はまころいす」の記録。

PROP PRESS

読売新聞
平成6年6月15日に掲載



障害者の自立へ "ハイテク"作戦

大阪にミニ授産施設

コンピューター技術をマスターすることで、障害者の職業的自立を目指す全国でも例のないミニ授産施設「プロップ・ウイング」（大阪市北区）がスタートした。CAD（コンピュータ設計）など本格的にパソコンを駆使する施設で、関係者は「将来は会社組織に発展させたい」と夢を膨らませている。

障害者の就労を支援している民間ボランティア団体「プロップステーション」（大阪市北区、竹中ナミ代表）が設立した。

二年前から「障害があってもコンピューター技術を学べば、ハンデを感じることなく就労できる」とセミナーを開催。これまでに約八十人の障害者が、コンピューターグラフィックスなどの技術を学んできた。

しかし、限られた講習期間では、就労レベルに達するのは難しく、実際の仕事につなぐ施設として「ウイング」の構想が生まれた。大阪市から年間五百七十万円の助成も受ける。

今のところ、通う障害者は二十五歳から四十八歳までの男女五人。いずれも重度で、四人は車いす。

CADを使った産業機械の設計会社「ソラーナ テクノ」（大阪市港区）が全面協力。当面、出来上がっている手書きの図面をデータベース化してコンピューターに取り込むトレースの技術を学ぶ。さらに、商店や中小企業の会計システムの受注も目指す。

同社の草柳健社長(四七)は「官公庁や企業の手書きの図面をデータベース化すれば、新しい図面を書く場合でも共通部分は簡単に使える。需要は増えるはずで、ビジネスパートナーとしても付き合える」と話す。

労働省障害者雇用対策課は「コンピューターを使って障害者の職域を拡大する試みは画期的。重度障害者へ大いに励みになる」と期待を寄せている。

▲スタートした障害者の"ハイテク"ミニ授産施設

実務部門プロップ・ウイングの運営

大阪市からの助成金により、企業との連携をとりつつ上級者コースのセミナーなどを実施しています。将来的に、教育・研修・開発部門と、障害を持つ人と持たない人が対等に働く企業部門とに発展していくことを目指しています。専従の所長　鈴木重昭が、ボランティア講師の皆さんとともに、技術指導を担当しています。

奉仕活動／冒険／スポーツ

元気パパ はばたく

ボランティア活動に精を出すエンジニア、海にロマンを求める冒険パパ…。お父さんといえば仕事一筋、休みは家でゴロ寝といわれたのは、ひと昔前。共働きの増加や週休二日制の広がりで、その役割は微妙に変化しつつあり、仕事以外に多彩な顔をもつ元気なお父さんが増えている。あす十九日は「父の日」、お宅のお父さんは？

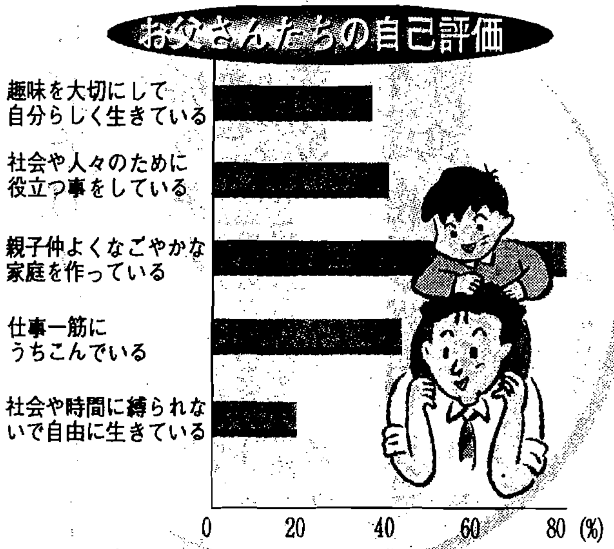
◇よき市民◇

社団法人・大阪ボランティア協会（大阪・北区）に事務局を置く「プロップ・ステーション」（代表、竹中ナミさん）は、コンピューターを利用して障害者の自立を支援する市民グループ。障害者運動を進めてきた竹中さんが、これからの障害者にコンピューター技能は欠かせない、と三年前から始めた。

週一回のセミナーやパソコン通信などの活動を支えるのは、五十人を超すボランティア・スタッフ。ほとんどが、現役のサラリーマンだ。

「コンピューターは日進月歩。それだけに実務にたずさわっている人の生きた知識がほしい。忙しいエンジニアたちが時間を割いてくれるか不安もありましたが、さすが日本株式会社のお父さんたち、度量は広かった」と竹中さん。

「仕事一筋」「休みはゴロ寝」返上



〔くもん子ども研究所・小・中学生をもつ父親568人〕

クボタ素形材事業部情報化推進プロジェクト課長補佐の柳原秀基さん（三八）も、度量を買われた一人。一年ほど前、パソコン通信仲間だった竹中さんからメーン・コンピューターの修理を相談されたのをきっかけに活動に参加した。

パソコン通信で送られてくる質問に答えるのが役目で、緊急を要することもあるので毎日のチェックは欠かせない。「飲んで帰ったときなどは、ちょっとしんどい。でも、組織に縛られない自分の世界をもつ楽しさを覚え、この四月からは地域の子ども会の会長も引き受けてしまった」

多彩な顔持ち 輝いてます！

こんなお父さんは確実に増えている。大阪ボランティア協会に寄せられる「私も参加したいが…」といったサラリーマン層からの相談は、ここ十年で四倍に。企業によるボランティア研修への指導員派遣も昨年度は百三十八回と、前年の二・七倍にのぼった。

同協会事務局長の早瀬昇さんは「よき企業人、よき家庭人であると同時に、よき市民であろうというのがいまのサラリーマンのトレンド」と話す。

産經新聞
平成6年6月18日に掲載